日本細菌学会
北海道支部会報

特集
北海道胆振東部地震の被害と対応

2018 年 12 月 第 27 号

編集・発行 日本細菌学会北海道支部

目　次

< 特集 北海道胆振東部地震の被害と対応 > - 1

はじめに - 2

細菌学会北海道支部会報編集委員長　白石 宗

北海道胆振東部地震への対応 - 酪農学園大学獣医学群食品衛生学ユニット - - 3

酪農学園大学 獣医学群　臼井 優

停電がもたらしたもの - 北大保健科学研究院 感染制御検査学研究室 - - 4

北海道大学大学院 保健科学研究院　大久保 寅彦

備えることの大切さ - 5

北海道大学大学院 歯学研究院　佐伯 歩

北海道胆振東部地震への対応 - 札幌医科大学医学部微生物学講座 - - 6

札幌医科大学 医学部　白石 宗

遠隔地からの対応 再び ～二度の経験から～ - 7

帯広畜産大学 獣医学研究部門　豊留 孝仁

地震から得た教訓

- 北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターバイオリソース部門のケース - - 8

北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター　中島 千絵

地震発生時における留学生への対応 - 10

北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター　古田 芳一

北海道胆振東部地震にて… - 12

北海道医療大学 歯学部　宮川 博史

2 度目の大地震を経験して - 13

酪農学園大学 獣医学群　村田 亮

< ご挨拶 >

異動のご挨拶 - 15

北海道医療大学 新学部設置準備室　松尾 淳司

< お知らせ >

第 85 回北海道支部学術総会を主催するに当たって - 18

酪農学園大学 獣医学群　内田 郁夫

第 92 回日本細菌学会総会の概要と準備状況について - 19

北海道大学大学院 保健科学研究院　山口 博之

日本細菌学会北海道支部会則 - 22

日本細菌学会北海道支部学術総会歴代開催記録 - 26

日本細菌学会北海道支部役員名簿 - 29

編集後記 - 32

日本細菌学会北海道支部長　横田 伸一

特集
北海道胆振東部地震の被害と対応

はじめに

今年の特集は、「北海道胆振東部地震の被害と対応」と題して、9 月 6 日未明に発生した北海道胆振地方中東部を震源とした地震について、各研究室の被害とその対応について紹介します。

先の地震では、道内厚真町にて震度階級で最も高い震度 7 を記録し、その被害は地震による直接的なものだけでなく、その後の全道におよぶ長時間の停電や断水などにより、より大きな被害が生じました。また、この前日には台風 21 号が北海道を通過し、台風による負傷者や建物の倒壊、倒木、さらには地盤の軟弱化が発生し、このことも地震の被害が拡大した原因になったといわれております。まさに、最悪のタイミングで北海道は天災に見舞われました。ライフラインの復旧までには、日常生活はもちろん、研究室でも様々な対応に追われたことと思います。そこで今回の特集により、他の研究室の実際の被害や対応を知ることで、普段からの備えや心構えを再確認していただくとともに、防災意識の向上につながれば幸いです。

本特集を掲載するにあたってご協力いただいた 9 名の先生方、また 2 名の留学生の方々に改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

最後に、今回の天災で亡くなられた方のご冥福と被災された方々の一日も早い復興を心からお祈りします。

日本細菌学会 北海道支部会 支部会報編集担当
札幌医科大学 医学部 微生物学講座
白石 宗

北海道胆振東部地震への対応 - 酪農学園大学獣医学群食品衛生学ユニット -

2018 年 9 月 5 日の朝は、その日の深夜に通過した台風により、大学前や大学内の大きな木が倒れ、通勤にも苦労する状況であった。そして、大学に到着すると学内は停電しており、フリーザーに保存してあるサンプルを守るために、ドライアイスの調達を余儀なくされた。幸いにも、午前 10 時には停電は復旧し、ドライアイスの購入も不要であったと胸をなでおろしていた。

しかし、9 月 6 日未明に、今度は北海道胆振東部地震が起こった。大学の研究室内の備品等の倒壊はなかったものの再びの停電。前日に残ったドライアイスでその日は切り抜けました。しかし、復旧が見込めない中、サンプルを守ることが難しいと判断し、翌日は、再び、ドライアイスを調達することにしました。信号機もついていない中、車を運転し、なんとかドライアイスを調達し、真っ暗な大学で、フリーザーにドライアイスを詰めました。酪農学園大学の電力が復旧したのは、地震が起きてから約 2 日後で、サンプルを守ることができたか不安でしたが、何とか乗り切ることができました。災害に対する備えが脆弱であったことを自覚するとともに、今後の備えについて再度考えることとなりました。

写真は、台風後の構内の様子。
木が倒れ、道路が閉鎖されていた。

酪農学園大学　獣医学群
獣医学類　食品衛生学ユニット
臼井 優

停電がもたらしたもの - 北大保健科学研究院 感染制御検査学研究室 -

本研究室では、幸いにも地震の揺れによる直接的影響はほとんど発生しませんでした。一方、停電ではフリーザーと CO_2 インキュベーターが使えなくなり、自家発電装置も設置されていないため、「下手に触らずに放置し、復帰を待つ」という消極的対応をとりました。また、本研究室では重要なサンプルは液体窒素缶に保存していたため、もしフリーザーの中身がダメでもどうにかなる、という保険があったのが救いでした。

札幌市北区では復帰までの所要時間にバラつきがあり、本研究室が復旧したのは 7 日夕方でした（北大の中でも低温科学研究所などではあっさり復帰したらしいですが…）。約 36 時間ほど停電状態となりましたが、後日おそるおそる確認したところ、菌株や細胞は一応培養可能であり、どうにか致命的な事態は避けることができました。むしろ電気の復帰後、溶けた水が再凍結する前に拭き取る作業がとても大変でした。このような影響はありましたが、その一方、停電や断水、余震への恐怖からラボへ避難してきた大学院生とじっくり語り合う時間をもつことができました。普段は仕事に追われてなかなか時間を作ることができませんが、停電で何もできないがゆえに人と話す時間を持てたことは、停電で得られた意外な収穫だったように思います。

北海道大学大学院　保健科学研究院
病態解析学分野　感染制御検査学研究室
大久保　寅彦

備えることの大切さ

北海道大学がある札幌市北区は震度 5 を記録し、大変大きな揺れがありました。研究室の機器は落下などにより、破損してしまった物もありましたが、転倒防止器具の設置などが適切になされていたため、被害は最小限に抑えることが出来たのではないかと思います。

研究室の環境に関しては、大学の安全衛生本部の方が定期的に検査に訪れて下さり、比較的安全な環境が維持されております。もし転倒防止器具の設置がなかったら、試薬ビンが不適切なところに置かれていたら、ゾッとするくらい大惨事になっていたかと思います。

これまで、研究室の環境を整えることは、法令順守や検査のために行っているという認識が強かったのですが、身を守るために行うものだということを痛感し、感謝の気持ちで一杯になりました。

北海道大学大学院 歯学研究院
口腔分子微生物学教室
佐伯 歩

北海道胆振東部地震への対応 - 札幌医科大学医学部微生物学講座 -

2018 年 9 月 6 日未明に起こった北海道胆振東部地震では、札幌医科大学がある札幌市中央区は震度 4 を記録したものの、幸い地震による建物の倒壊などの大きな被害はありませんでした。我々の微生物学講座では、停電によって電源がおちたフリーザー内のサンプルを自家用発電電源に繋がったフリーザーに移動するため、朝から対応に追われました。停電で公共交通機関も止まっていたため、出勤可能なスタッフと大学院生で作業を行い、その日は解散になりました。（病院が多いためか）大学がある地域は、他の地域と比べてとても早い段階で、その日の午後には電気も復旧してサンプル等の被害もありませんでした。ただ、我々の講座は 12 階にあり、地震直後に朝早く出勤した際は、エレベーターが使用できる状態になく、窓のない真っ暗な階段フロアをスマートフォンの灯りを頼りに 12 階まで登るという事態がありました。道内の被害を考えると全く大したことではありませんが、日頃特に意識せず利用していたエレベーター、しいては電気のありがたみを肌で感じた出来事でした。

札幌医科大学 医学部
微生物学講座
白石 宗

遠隔地からの対応　再び　～二度の経験から～

2018 年 9 月 6 日未明に起こった北海道胆振東部地震では、帯広市でもやや強い揺れ（震度 4）を感じました。地震直後に停電となりましたが、夜が明けるのを待って私は午前 5 時過ぎに帯広畜産大学の研究室に確認に向かいました。研究室のある建物等に目立った被害はなく、一時帰宅して 8 時前に再度研究室に向かい、午前中に緊急にドライアイスの調達や情報収集などを行いました。翌日からの東京での所用のために、私は自身の研究室のメンバーや他の研究室の先生方に協力をお願いして、復電を見届けずに6日午後から大学を離れました。その後は出先から情報のやりとりをしつつ、7 日には一部冷凍庫への非常用電源の導入、8 日夜から朝にかけての復電へとつながっていったと記憶しています。物質・微生物の漏出などは十分な対策がなされていたことから心配ありませんでしたが、一部の大事な資源や材料などが失われました。

そのような中で「自分がその場にいなかった場合にどうするか？」ということを「再度」考えさせられました。「再度」というのは 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災にも自分が米国滞在中で現場（当時、千葉大学に所属）にいなかったためです。3.11 発生後も今回も遠隔地からの情報のやりとりではインターネットがインフラとして大きな役割を果たしました。3.11 発生時と現在では私の立場も変わり、また今回は停電が長引くにつれて現場とのやりとりが難しくなることも経験し、いざというときの手順書準備といった日頃からの対策の必要性を強く感じました。それに加えて、周囲の教員・職員との連携等の必要性も強く感じました。

今回の停電を通じて、非常用電源や緊急用の冷媒確保といった今後の課題・対策が見えてきました。自分が現場ですぐに参照するためにも、また自分が遠隔地にいたとしても自身の研究室メンバーや周囲の教員・職員に連携して当たってもらえるようにさらなる対策をしていきたいと考えています。

帯広畜産大学 獣医学研究部門
豊留 孝仁

地震から得た教訓

- 北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターバイオリソース部門のケース -

北海道大学の場合、不幸中の幸いは、ちょうどその週末に年 1 回の全学停電を控えていたことであろうか。お陰で非常時に発動する自家発電装置に繋がっている冷凍庫、冷蔵庫、インキュベータ等のチェックと、大事な試薬の移動等の停電対策が済んでおり、被害が最小限で済んだ。停電発生時、通電回復時に行う作業も皆が把握していたため慌てずに済み、煩わしく感じていた毎年の計画停電が、実際の停電対策の良い訓練となっていたことを実感した。また、日頃から大学全体で定期的な安全点検と改善を行っていたため、棚やロッカーの倒壊対策が万全で、揺れた割には積んであった書類が崩れた程度で、危険な物の落下破損、倒壊事故等は無かった。

自家発電装置には、非常時に備えて常時24時間分の軽油が入っており、実際、27時間もった。想定外だったのは、こうした全道的な緊急事態のときは、業者も受注、運搬できる状態には無いという点だろうか。追加の軽油を注文しようにも、業者と連絡が取れず、27 時間後には燃料が切れ、全ての電源が落ちた。北大の中では病院だけが優先的に電力が回復していたが、当センターはBSL3施設があったため、病原体の漏洩があってはいけないということで、病院に継いで電力を回してもらい、約 31 時間後に通電。主要な機器の停電は数時間で済み、冷凍庫もマイナス 80 度がマイナス 50 度まで上がったところで回復できた。教訓は、限られた燃料を有効に使うための電気の配分方法。冷凍庫に優先順位を付け、燃料が足りそうに無いときは多少庫内温度が上がっても大丈夫なものから順に電源を落として行く、もしくは冷凍庫ごとに温度に格差を付けて、優先順位の低い物は高めの温度に設定して節電モードとしておく等の対策が有効かもしれない。当ラボでは冷凍庫の温度上昇による保存株の損失は無かったが、ATCC が北海道限定で3割引キャンペーンを行ったため、便乗して欲しかった菌株を買わせて頂いた。細胞株はちょうど配送途中の物があり、運送会社にて数日間保管となったためか培養時の発育が悪かったが、発送側の理研 BRC が同情して無償で再送してくれて有り難かった。

その他の設備上の問題は、電気が復帰した後も想定外に水が出ず、週明けまでトイレに入れなかったこと。これは、隣の建物と水の汲み上げポンプを共有していたためで、災害が起こる前に気付いていれば、週末のセンター内待機も、もう少し楽なものになっていたと思う。役立った物は、手回し式の懐中電灯。これも数台買い置きがあって、充電さえままならない状況下では、非常灯が付いていない場所の移動時に大いに役立った。副産物は、停電後しばらく全学で厳しい節電を徹底したため、各人に節電を心

掛ける良い癖がついたことであろうか。当センターの近辺では、地震前日の強い台風で巨木が数本倒れて遊歩道を塞いでいたが（写真）、続く地震で処理が遅れ、遊歩道の脇には放置された倒木を避けて人が踏み固めた迂回路ができた。災害と言うものはまとめてやって来ることがあり、平常時からの備えが緊急時の被害を最小限に抑える上で不可欠であることを、身を持って知った 1 週間であった。

北海道大学
人獣共通感染症リサーチセンター
バイオリソース部門
中島　千絵

地震発生時における留学生への対応

北海道胆振東部地震の発生当時、私自身は道外に滞在していたため、実際に地震に遭った当部門留学生二人の寄稿をもって代えさせていただく。日本語はほとんどわからず、地震の経験もない彼らの混乱がいかほどのものであったかが読み取れる。留学生が半数近くを占める当センターにとって、英語で迅速な情報提供を行うことの大切さを思い知った機会であった。

北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター
古田 芳一

6th of September night, my family and I were sleeping peacefully until I felt somebody shake me strongly and soon a phone alarming loudly. House was quickly shaking and rattling and the ceiling was swinging. We straightly realized that it was the earthquake, as we had heard the earthquake frequently happens in Japan. That was the first experience with earthquake for us who came from where earthquake seems to happen far from their country, Mongolia.

We were nervous then it became a fear after the electricity went out. We had absolutely no idea about what should do. Soon, my friends called me and said that “Get out an apartment”. We quickly wear clothes and left the apartment. Outside, there were completely dark and one, two foreigners just stand and they didn’t know where to go, like us. Our friends came to us and we just stand outside until the sun rises. We went back to the house and prepare some things such as food, clothes, torch, lighter and tried to restore the water as much as we can.

Again, my friend called me and told about people make line front of the stores to restore foods, beverages and so on. That time we just did same things what others do, especially Japanese people. Because the electricity went out we couldn’t get any information from sources and even sources were available, all information came in the Japanese language.

My teacher sent me an e-mail, including some information regards after disaster condition. From that e-mail, I realized that the electricity won't come following few days and earthquake can frequently happen again, after a strong

earthquake, last night. Two days later, electricity came and everything is normal again, except the aftershock, it almost last end of the November. Situation was very tense.

Tuvshinzaya Zorigt from Mongolia

It was in the early hours of September 6, 2018, when my wife and I experienced a sudden unexpected shake. We were both awake at the time but had no idea what was going on. The vibrations were so intense that I began to think the building was going to collapse. I could read the panic on my wife's face, but I tried to be strong and assure her that we would get through it. My voice was trembling, and my heart was racing. The loud emergency alert sound on my phone made our fears grow even more. The lights had gone off and I could hear things falling on the floor. I grabbed my wife's hand and quickly moved to the closet where we sat in fear until the shaking ceased.

After all the shaking had stopped, we decided to leave the apartment though we did not know where to go or what to do next. Eventually we went and stood in the open space around Family Mart in Kita 22, where we stayed for over an hour. During that time, we made phone calls to our families back home to assure them that we were all right. Afterwards, we returned to our apartment but couldn't get any sleep. We still didn't have power, but water was available. We felt unsafe, as we didn't know what to expect next.

In the morning we left our apartment and went to the Research Center for Zoonosis Control (CZC) where spent most of our time over the next few days. In addition to the safe shelter we accessed at CZC, we also had access to food and drinking water. After a few days, power supply was restored, and we fully returned to our apartment.

We did not experience damage to any of our valuable items. Despite the situation having normalized, we were still very afraid whenever aftershocks hit. That earthquake experience will never be forgotten. I look back on it as one of the most terrifying experiences of my life.

Misheck Shawa from Zambia

北海道胆振東部地震にて…

未明の北海道胆振東部地震後、大学では、建物や研究室では大きな被害はありませんでした。この時、ちょうど歯科基礎医学会があり、歯学部の基礎系の教員の多くが不在で、当講座でも私だけでした。大学には来たものの何もできない状態で、早く停電が復旧してくれることを祈りつつ帰宅することしかできませんでした。幸いにも翌日には停電も復旧していたので保存菌株などに大きな被害もなく助かりました。大学の講義等が再開されるまでは、6 日間かかり、通常の講義などは 9 月 11 日からで、講義などの調整で日々追われることとなりました。

私的なことになりますが、私の住んでいる札幌市北区あたりは停電復旧が市内では遅い方でした。日ごろ何気なく使用している電気のありがたさが身に沁みました。あと、日頃から災害に対する準備していない我が家でしたので、食品を手に入れるのが大変でしたが、大学のある当別では野菜も無人販売などで、地震当日に若干手に入れることができ、安心できました。道内では大きな被害にあわれている方々もいる中での出来事ですが、今後いつ自分に起きても不思議ではないので、いろいろな対応についてしっかりしておこうと思う今日この頃です。早い完全な復旧を願っています。

北海道医療大学 歯学部
微生物学分野
宮川 博史

2 度目の大地震を経験して

先日の地震、みなさまどのように過ごされたのでしょうか。当研究室では、内田教授とともに、ライフラインが復旧するまで「ジタバタしない！」と決めました。実は私、前職・東京農業大学でも教員 1 年目に 3.11 を経験しております。このことが役立ったかどうかは分かりませんが、当時「結局あれこれ心配してもなるようにしかならない」と強く感じたことを思い出しました。そんなわけで、当日は学生の安否確認完了後はすぐに帰宅し、とにかく慌てて行動せずに新しい情報が入るまでは落ち着いて過ごすよう努めました。実は早朝の暗がりの中、試験管（レプトスピラ入り）の散乱などを目にしていたのですが、今これを片付けるのは逆に危険と判断して引き返した次第です。

後日、内田教授から試験管は 1 つも破損していなかったと伺い、改めてネジ蓋つきガラス試験管の丈夫さに感謝いたしました。とともに、菊池前教授の退官後、いちいち洗うのがめんどうくさいなぁ…と全てディスポにしてしまいたいと考えていたことを深く反省した次第です。

3.11 当時、計画停電などを経験する中で、いくらでも節電の余地があることと、皆が協力し合うことの大切さを知ったはずでした。しかし人間は忘れやすい生き物です。2 度目の大地震を経験し、今度こそ自分の価値観や生活スタイルを見直そうと考えております。煌々と光る街のネオンは気持ちまで明るくしてくれますが、一方で生活の中で必要のない電源をこまめに落とす、そんなメリハリのある現代人になりたいものです。

酪農学園大学 獣医学群
獣医細菌学ユニット
村田 亮

ご挨拶

異動のご挨拶

北海道医療大学 新学部設置準備室
松尾 淳司

北海道医療大学新学部設置準備室の松尾淳司と申します。2018 年 4 月に異動してまいりました。この場をお借りして、一言ご挨拶申し上げます。

まずは現在所属の北海道医療大学について、簡単にご紹介いたします。北海道医療大学は、1974 年に知育・徳育・体育の三位一体による医療人としての全人格の完成を建学の理念として、開学いたしました。薬学部を皮切りに、歯学部、看護福祉学部（看護学科、臨床福祉学科）、心理科学部、そしてリハビリテーション科学部（理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚療法学科）の順に開設され、現在 5 学部 8 学科からなる医療系総合大学です。ここに第 6 番目の学部として、新たに臨床検査技師を養成する医療技術学部臨床検査学科を開設するにあたり、そのメンバーに加わるため異動してまいりました。現在、私を含めて 8 名の教員とともに開設準備を進めており、先月には無事に設置の認可を頂くことができました。2019 年 4 月には新たに 5 名の教員も加わり、医療技術学部臨床検査学科がスタートしますので、北海道医療大学は 6 学部 9 学科の医療系総合大学へと成長することになります。

私は学生としてだけではなく、教員としても臨床検査技師の 3 年制教育（医療技術短期大学部）から 4 年制教育（医学部保健学科）への変遷を目の当たりにしてまいりました。しかしながら、北海道医療大学における医療技術学部臨床検査学科の開設は、まさにゼロからのスタートとなりますので、学部の規程・指針作りから、実習室のレイアウトの作成、設備・備品の選定など、慣れない業務に四苦八苦しているところです。また私は、微生物学関連科目を中心に、合計 21 科目（うち実習科目は 5 科目）を担当する予定ですので、その準備にも追われているのが現状です。来年度以降、年次進行で科目数が増えていくことになりますが、学部が完成する 4 年後にどのように学生教育を行っているか、今はまだ想像できないというのが本音でもあります。しかしながら、まずは第一期の学生を無事に社会に送り出せるように最大限の準備することが、私の最大の使命と考えております。

以上、簡単に現状をご紹介いたしました。今後とも先生方のご指導を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

松尾 淳司（Junji Matsuo）

<略歴>

大阪府大阪市出身。2002 年に北海道大学医療技術短期大学部衛生技術学科に着任。その後、医学部保健学科、大学院保健科学研究院に変遷。2018 年より北海道医療大学新学部設置準備室に所属し、現在に至る。

<主な研究テーマ>

寄生生物による感染修飾機構の解析

<趣味>

本を読むこと、知らないことを調べること

お知らせ

第 85 回北海道支部学術総会を主催するに当たって

酪農学園大学　獣医学群　獣医学類　獣医細菌学ユニット
内田　郁夫

2018 年 9 月 8 日に開催予定となっていた第 85 回日本細菌学会北海道支部学術総会が 9 月 6 日に発生した北海道胆振東部地震のために中止となりました。会場予定の酪農学園大学には大きな被害はでていなかったものの、電気、バス・鉄道などの交通機関等の復旧の目処が立っていなかったことから中止を決定しました。特別講演をお願いした先生をはじめ、演題発表予定であった皆様方には発表の準備等多大なご負担をお掛けしてしましたことをお詫び申し上げるとともに、大地震に見舞われた方々に心からお見舞い申し上げます。

本年度の学会が中止となったため 2019 年度の総会を「第 85 回北海道支部学術総会」として再度総会長を担当することになりました。特別講演としては、本年度予定していた「耐性菌時代の新たな戦略―ファージの応用（仮題）」について、東京工業大学の丹治保典先生と酪農学園大学の岩野英知先生のお二人にお話しいただく予定になっております。第 85 回の支部会が成功するように、会員の皆様、ご協力よろしくお願いいたします。

内田　郁夫（Uchida Ikuo）

<略歴>

北海道上川郡当麻町出身。1981 年　北海道大学大学院獣医学研究科修了、1981 年農林水産省家畜衛生試験場（現：国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究部門）、2017 年酪農学園大学獣医学群獣医学類獣医細菌学ユニット、現在に至る。

<主な研究テーマ>

サルモネラが産生する百日咳毒素様毒素の病原因子としての機能解明

第 92 回日本細菌学会総会の概要と準備状況について

北海道大学大学院 保健科学研究院 病態解析学分野
山口 博之

第 92 回日本細菌学会総会を来年 4 月 23 日（火曜日）から 4 月 25 日（水曜日）にかけ札幌コンベンションセンターで開催いたします。2011 年に弘前大学の中根先生が IUMS との合同学会として日本細菌学会を開催されましたが、札幌での単独開催は、2000 年に皆川先生が札幌で開催されて以来、約 20 年ぶりとなります。以下、概要と準備状況についてご報告させていただきます。

前日 4 月 22 日月曜日夕方 4 時から、同コンベンションセンターにて魅力的な研究を精力的に進められていますお二人の講演者をお招きし、市民公開講座を開催します。お一方は、イグノーベル賞を受賞された中垣俊之先生で『単細胞生物である粘菌が迷路を解ける』、もうひとかたは、海洋研究開発機構の高井研先生で、『「海洋と生命多様性の惑星＝地球」における未だ知られざる生命の多様性の探求 』と題して、お話をしていただきます。司会進行は、北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターの中島千絵先生にお願いいたしました。公演後の軽快な楽しいトークショーもご期待下さい。 このセッションは、北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター（鈴木定彦センター長）にご協賛いただきました。

登録演題数ですが、349 演題となりました。残念ながら昨年に比べ 50 演題程登録数が少なくなっています。最近では IUMS 開催年度に引き続き開催されました長崎の学会と同じレベルです。地方開催に際しては、どうしても参加者数が減少いたしますので、致し方ないとは思っておりますが、濃厚な学会になるよう鋭意準備を進めます。現在、選抜 WS 希望者からの選抜審査を行っています。最優秀賞・優勝への賞金・副賞は、予算の関係上、質素なものとなりますことをご了解ください。

今回の学会ではデジポス（デジタルポスター）と称して全ての一般演題発表者にスライドを用いてショートプレゼンテーションを行っていただきます（発表 3 分、質疑応答 2 分）。デジポスセッションは特別展示室大ホールに 70 インチモニターを入れ 3 箇所で同時並行で実施しますが、北海道支部の多くの先生方に司会と再審査を実施していただきます。ご都合に合わせ司会者の役割分担担当時間枠は変更いたしますので、

ご遠慮なく山口までお申し付けください。どうぞよろしくお願いします。また 3 日目に実施する選抜 WS セッションは計 42 演題となる予定です。初選抜 WS の選定から漏れてしまった演題は、デジポスでの再審査を行い、若干名（6 演題）ですが選抜 WS セッションに組み込む予定です。

今回は予算の関係上、国際シンポジウムを 1 セッションといたしました。しかも北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターの鈴木定彦センター長のご厚意によりが海外から招聘する外国人費用をまかなっていただきました。誠にありがとうございます。また ICD 講習会は、札幌医科大学の横田伸一先生にコーディネートをお願いしております。予算の関係上、講演者の選定など、大変なご苦労をおかけしてしまいました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

最後に運営資金の調達状況ですが、3 枠あるランチョンも既に 2 枠が埋まっており、寄付金も順調に集まりつつあります。事務局は AE 企画に委託していますが、力強い営業力に感謝いたします。一方、今回の学会では、雪による混乱を避けるために、4 月末の開催といたしました。例年同様に参加者数が読めませんので、参加費を値上げいたしました。支部の先生方にもご理解・ご協力を他願い申し上げます。

参加者が、時間を忘れて討議できるような、そんな熱い学会にできればと考えています。チームワークの良い北海道支部だからこそできる、身の丈にあったアットホームな学会を目指します。オール北海道で学会開催にあたりたいと思いますので、支部の先生方のご理解・ご協力の程、どうぞよろしくお願いいたします。 *本文は、第 92 回日本細菌学会総会ホームページ挨拶文に追加・抜粋した。

山口 博之（Hiroyuki Yamaguchi）

<略歴>

東京都出身。杏林大学保健学部臨床検査学科卒業、博士（医学）、1983 年 杏林大学医学部微生物学教室実験助手、1992 年 杏林大学医学部微生物学教室助手、2000 年 杏林大学医学部微生物学教室講師、2003 年 アメリカ南フロリダ大学免疫微生物教室へ留学、2002 年 杏林大学医学部感染症講座講師復職、2004 年 大阪大学大学院医学系研究科生体情報科学講座助教授、2006 年

北海道大学医学部保健学科生体情報学講座教授、2008 年 北海道大学大学院保健科学研究院病態解析学分野教授、現在に至る。

<研究キーワード>

微生物相互作用，細胞死（アポトーシス）、低酸素と進化、公共環境微生物叢、病原因子、繊毛虫、アメーバ、原生生物、クラミジア

<趣味>

いずれも今はできませんが….マラソン、山登り、釣り、将棋、星を見ること、などなど

日本細菌学会北海道支部会則

総　則

1. 本会は日本細菌学会北海道支部という。
2. 本会は北海道在住の細菌学関係研究者によって組織される団体である。
3. 本会は細菌学領域の進歩を促進することを目的とする。
4. 本会の目的を達成するために次のような事業を行う。
   イ. 学術集会（学術総会・集談会等）の開催
   ロ. 日本細菌学会本部との連絡
   ハ. 国内の関係諸機関諸学会との連絡
   ニ. その他必要と認められる事業

会　員

5. 本会の趣旨に賛成する人は会員となることができる。
6. 会員は会費を納めなければならない。
7. 会員はその業績を学術総会において発表することができる。
8. 会員は評議員1名以上の賛成を得た上で本会の運営に関する議案を評議員会に提出することができる。
9. 本会の趣旨に賛同し、本会の活動を援助するために、毎年一定の賛助会費を納めた団体あるいは個人を賛助会員とする。

役員及び役員会

10. 本会に次の役員をおく。

支部長 1名	評議員 若干名	庶務係 1名
会計係 1名	幹事 若干名	会計監事 2名

11. 次期支部長は現評議員の互選に基づきこれを定め総会において了承を得る。
12. 新評議員は会員の中から、支部長がこれを委嘱する。
13. 会計監事、幹事、庶務係及び会計係は会員の中から支部長がこれを委嘱する。
14. 支部長、幹事、庶務係ならびに会計係は会計監事になることができない。
15. 支部長は本会を代表し、会務を統括する。
16. 評議員は支部長の選出のほか、本会の事業の企画、立案、運営等について評議する。
17. 評議員会の議事は、出席者の過半数を持って決せる。但し、可否同数の場合は支部長の判断により決する。
18. 幹事は支部長を補佐する。

19. 会計監事は本会の会計を監査する。
20. 評議員会及び幹事会は支部長が召集する。
21. 役員の任期は 2 年とし再任を妨げない。
22. 役員に欠員を生じた場合の後任役員の任期は、前任者の残任期間とする。

集　会

23. 支部総会及び学術総会は、原則として年に 1 回開催される。
24. 支部総会において支部長は会務の報告を行う。
25. 本学会の運営の基本に関する事項及び本会則の変更は、会務総会において出席者の過半数の賛同によって決定する。
26. 時宜に応じて他の学会、研究会等と合同して集会を開催することができる。
27. 総会長は、原則として学術総会の一般演題より優秀な発表を選出しなければならない。その名称を日本細菌学会北海道支部会賞とする。ただし表彰の内容は総会長に一任する。

学術総会長

28. 学術総会長は、評議員会で推薦し、支部総会で決定する。

会　計

29. 本会の経費は会費及び賛助会費、日本細菌学会からの補助金、その他の収入をもってこれに充てる。
30. 本会の会計年度は 1 月 1 日に始まり 12 月 31 日に終わる。
31. 会計監事はこの会の会計の監査を行うものとする。

事務所

32. 本会の事務所は支部長所在の機関に置くものとする。

付　則

33. この会則は平成 3 年 2 月 27 日より施行する。
34. 会則の変更は評議員会の議決により支部総会の承認を必要とする。
35. 支部会員会費は年額 1,000 円とする。賛助会員は一口 10,000 円とする。
36. 講師謝礼金
    イ. 集会の講師に対する謝礼金及び旅費を支出することができる。

ロ. 集会の講師謝礼金は、北海道在住の講師については 2 万円、その他の講師については 3 万円とする。

ハ. 講師謝礼金の変更は評議員会及び総会でこれを報告しなければならない。

37. 学生研究奨励金

イ. 北海道支部学術総会開催地と発表者が所属する大学・大学院とが遠隔である場合、助成金として 1 万円を支部会幹事・評議員会の審議を経て支給する。

ロ. 対象者は大学学部学生と大学院生とする。

38. この会則は平成 10 年 1 月 1 日より一部改正施行する。

39. この会則は平成 14 年 1 月 1 日より一部改正施行する。

40. この会則は平成 16 年 1 月 1 日より一部改正施行する。

41. この会則は平成 24 年 1 月 1 日より一部改正施行する。

42. この会則は平成 25 年 1 月 1 日より一部改正施行する。

日本細菌学会北海道支部学術総会
歴代開催記録

回	開催年月日	総会世話人 / 総会長	総会開催場所
18	1961.02.17	-	北海道大学医学部講堂
19	1961.11.28	-	北海道大学農学部新館
20	1962.02.17	植竹久雄（北海道大学医学部）	札幌医科大学西第 2 講堂
21	1962.11.17	飯田広夫（北海道立衛生研究所）	北海道立衛生研究所
22	1963.02.23	山田守英（北海道大学医学部）	札幌医科大学西第 2 講堂
23	1963.12.06	植竹久雄（北海道大学医学部）	北海道大学農学部本館中講堂
24	1964.02.22	平戸勝七（北海道大学獣医学部）	北海道大学獣医学部
25	1964.12.04	林喬義（札幌医科大学）	札幌医科大学西第 3 講堂
26	1965.02.19	三浦四郎（北海道大学獣医学部）	田辺製薬ビル 6F
27	1965.12.03	飯田広夫（北海道立衛生研究所）	北海道立衛生研究所
28	1966.02.18	伊藤英治（北海道大学理学部）	-
29	1966.12.09	大原達（北海道大学結核研究所）	田辺製薬ビル 6F
31	1967.12.09	林喬義（札幌医科大学）	札幌医科大学西第 3 講堂
32	1968.02.23	飯田広夫（北海道立衛生研究所）	札幌医科大学西第 3 講堂
33	1968.12.06	山田守英（北海道大学医学部）	武田ビル
34	1969.02.27	高橋義夫（北海道大学結核研究所）	武田ビル
35	1969.12.12	三浦四郎（北海道大学獣医学部）	武田ビル
37	1971.01.22	飯田広夫（北海道大学医学部）	武田ビル
38	1972.02.26	大原達（北海道大学結核研究所）	ムトウビル 6F 講堂
42	1974.09.27	林喬義（札幌医科大学）	ムトウビル 6F 講堂
43	1975.09.26	林喬義（札幌医科大学）	ムトウビル 6F 講堂
44	1976.09.17	熊谷満（北海道立衛生研究所）	北海道立衛生研究所共用東講堂
45	1977.09.30	熊谷満（北海道立衛生研究所）	ムトウビル 6F 講堂
46	1978.09.29	鈴木武（北海道大学歯学部）	北海道立衛生研究所共用東講堂
47	1979.09.22	鈴木武（北海道大学歯学部）	北海道大学歯学部講堂
48	1980.09.26	梁川良（北海道大学獣医学部）	ムトウビル 6F 講堂
49	1981.09.17	梁川良（北海道大学獣医学部）	ムトウビル 6F 講堂
50	1982.09.17	山本健一（北海道大学免疫科学研究所）	ムトウビル 6F 講堂
51	1983.09.09	黒田収子（北海道薬科大学）	-
52	1984.10.26	飯田広夫（北海道大学医学部）	ムトウビル 6F 講堂
53	1985.09.13	飯田広夫（北海道大学医学部）	ムトウビル 6F 講堂
54	1986.09.19	伊佐山康郎（家畜衛生試験場北海道支場）	ムトウビル 6F 講堂

回	開催年月日	総会世話人 / 総会長	総会開催場所
55	1987.09.25	小熊恵二（札幌医科大学医学部）	ムトウビル 6F 講堂
56	1988.10.21	小熊恵二（札幌医科大学医学部）	大通り公園ビル（ヤクルト）会議室
57	1989.09.29	宮川栄一（家畜衛生試験場北海道支場）	家畜衛生試験場北海道支場会議室
58	1990.09.28	宮川栄一（家畜衛生試験場北海道支場）	-
59	1991.11.15	皆川知紀（北海道大学医学部）	ムトウビル 6F 講堂
60	1992.11.20	皆川知紀（北海道大学医学部）	北海道大学百年記念会館講堂
61	1993.11.13	平棟孝志（酪農学園大学獣医学部）	酪農学園大学獣医 3 号館
62	1994.10.29	中島良徳（北海道薬科大学薬学部）	北海道薬科大学
63	1995.10.07	馬場久衛（北海道医療大学歯学部）	北海道医療大学 P1 講堂
64	1996.09.21	江口正志（家畜衛生試験場北海道支場）	農林水産省北海道農業試験場
65	1997.10.25	渡邊継男（北海道大学歯学部）	北海道大学学術交流会館
66	1998.10.24	都築俊文（北海道立衛生研究所）	北海道立衛生研究所講堂
67	1999.10.23	藤田晃三（札幌市衛生研究所）	札幌市衛生研究所
68	2000.09.28-29	中根明夫（弘前大学）	弘前大学医学部
69	2001.10.27	絵面良男（北海道大学）	北海道大学水産学部
70	2002.10.26	菊池直哉（酪農学園大学）	酪農学園大学学生ホール
71	2003.09.14	大山徹（東京農業大学）	東京農業大学
72	2004.09.03	藤井暢弘（札幌医科大学）	札幌医科大学記念ホール
73	2005.09.17	柴田健一郎（北海道大学）	北海道大学学術交流会館
74	2006.09.02	磯貝浩（札幌医科大学）	ムトウビル 6F 講堂
75	2007.09.08	中澤太（北海道医療大学）	北海道医療大学サテライトキャンパス
76	2008.09.06	鈴木定彦（北海道大学）	北大獣医学研究科附属動物病院講堂
77	2009.09.18	山口博之（北海道大学）	北海道大学百年記念会館
78	2010.09.03-04	田村豊（酪農学園大学）	北大百年記念会館・酪農大学生ホール
79	2012.08.28-29	川本恵子・倉園久生（帯広畜産大学）	とかちプラザ 2F 視聴覚室
80	2013.08.30-31	丹羽光一（東京農業大学）	東京農業大学生物産業学部
81	2014.08.29-30	横田伸一（札幌医科大学）	札医大医学部臨床教育研究棟 1 階講堂
82	2015.09.05	中澤太（北海道医療大学）	北海道医療大学心理科学部 4F 講義室
83	2016.09.17	柴田健一郎（北海道大学）	北大大学院歯学研究科・歯学部講堂
84	2017.08.26	東秀明（北海道大学）	北大人獣共通感染症リサーチセンター

日本細菌学会北海道支部
役員名簿

日本細菌学会北海道支部 役員名簿（五十音順, 敬称略）

評議員	所属
磯貝 浩	札幌医科大学 医学部 動物実験施設部
内田 郁夫	酪農学園大学 獣医学群 感染・病理学分野
大山 徹	北海道文教大学 人間科学部 健康栄養学科
川本 恵子	帯広畜産大学 動物食品衛生研究センター
木村 浩一	北海道文教大学 人間科学部 健康栄養学科
○倉園 久生	帯広畜産大学 畜産衛生学研究部門 食品衛生学分野
小林 宣道	札幌医科大学 医学部 衛生学講座
○柴田 健一郎	北海道大学大学院 歯学研究科 口腔病態学分野 口腔分子微生物学
杉本 千尋	北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター 国際協力教育部門
鈴木 定彦	北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター バイオリソース部門
田村 豊	酪農学園大学 獣医学群 衛生・環境学分野
中澤 太	北海道医療大学 歯学部 口腔生物学系 微生物学分野
丹羽 光一	東京農業大学 生物産業学部 食香粧化学科
○東 秀明	北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター 感染・免疫部門
樋口 豪紀	酪農学園大学 獣医学群 衛生・環境学分野
松尾 淳司	北海道医療大学 新学部設置準備室
○山口 博之#	北海道大学 保健科学研究院 病態解析学分野 感染制御検査学
○横田 伸一*	札幌医科大学 医学部 微生物学講座

○:本会評議員、#:本会理事、*:支部長

幹事	所属
臼井 優	酪農学園大学 獣医学群 衛生・環境学分野
大久保 寅彦	北海道大学大学院 保健科学研究院 病態解析学分野 感染制御検査学
相根 義昌	東京農業大学 生物産業学部 食香粧化学科
佐々木 崇	札幌医科大学 医学部 動物実験施設部
佐藤 豊孝	札幌医科大学 医学部 微生物学講座
白石 宗	札幌医科大学 医学部 微生物学講座
豊留 孝仁	帯広畜産大学 獣医学研究部門 動物・食品検査診断センター
中島 千絵	北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター バイオリソース部門
長谷部 晃	北海道大学大学院 歯学研究院 口腔病態学分野 口腔分子微生物学
廣井 豊子	帯広畜産大学 獣医学研究部門 応用獣医学系
古田 芳一	北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター 感染・免疫部門
宮川 博史	北海道医療大学 歯学部 口腔生物学系 微生物学分野
村田 亮	酪農学園大学 獣医学群 感染・病理学分野

会計監事	所属
小華和 柾志	北海道大学大学院 医学研究科 医学教育推進センター
菊池 直哉	天使大学 看護栄養学部 栄養学科

編集後記

2018 年、今年の漢字は「災」でした。台風による風水害で大変な年だと思っていたら、9 月の震災が襲ってきました。今回の大規模停電で、本当に地震は予期しないトラブルをひきおこすものだと痛感しました。支部会員の皆様もそれぞれに大変な思いをされたことでしょう。記憶が鮮明なうちに記録に残すことで、少しでも今後の教訓になればと、今回は震災の対応について特集を組ませていただきました。原稿を執筆いただいた先生方に感謝いたします。

北海道支部では、予定していた支部学術総会を中止といたしました。総会準備も整っていたところでの中止にもかかわらず、引き続き来年の総会長を快くお引き受けいただいた内田郁夫先生には深く感謝申し上げます。すでに作成されていた抄録集を記録として残すかどうかは迷いました。学会によっては、中止の場合には抄録集をもって発表したものとするという対応も見受けられます。学生さんの業績として残したいという声もありました。今回に関しては、今年発表予定だった演題を来年発表すると二重発表となってしまうことを危惧して、今回の抄録集を記録としては残さず、第 85 回の延期という形をとりました。

さて、本来であればこの編集後記は、支部長を二期 4 年つとめた私の退任挨拶とするところでした。しかしながら、本支部会報をご覧いただければわかる通り、支部学術総会の延期や来年 4 月には山口博之先生が会長をつとめられる日本細菌学会総会が札幌で開催されるという特別の事情があります。もう一期（だけ）、支部長をつとめさせていただくこととなりました。皆様のご支援があってこその支部活動です。今後ともご協力よろしくお願い申し上げます。

2018 年 12 月

細菌学会北海道支部長
札幌医科大学 医学部 微生物学講座
横田 伸一

日本細菌学会 北海道支部会報 第 **27** 号 **2018** 年 **12** 月

編集主幹

横田 伸一 （日本細菌学会 北海道支部長 / 札幌医科大学 医学部）

編集委員長

白石 宗 （札幌医科大学 医学部）

編集委員

臼井 優 （酪農学園大学 獣医学群）
大久保 寅彦 （北海道大学大学院 保健科学研究院）
相根 義昌 （東京農業大学 生物産業学部）
佐々木 崇 （札幌医科大学 医学部）
佐藤 豊孝 （札幌医科大学 医学部）
豊留 孝仁 （帯広畜産大学 獣医学研究部門）
中島 千絵 （北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター）
長谷部 晃 （北海道大学大学院 歯学研究院）
廣井 豊子 （帯広畜産大学 獣医学研究部門）
古田 芳一 （北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター）
宮川 博史 （北海道医療大学 歯学部）
村田 亮 （酪農学園大学 獣医学群）

発行 ： 日本細菌学会北海道支部
事務局:札幌医科大学 医学部 微生物学講座
〒**060-8556** 札幌市中央区南 **1** 条西 **17** 丁目
Tel : (代表**) 011-611-2111 (**内線**) 27120**
Fax : 011-614-3732